

学習評価について

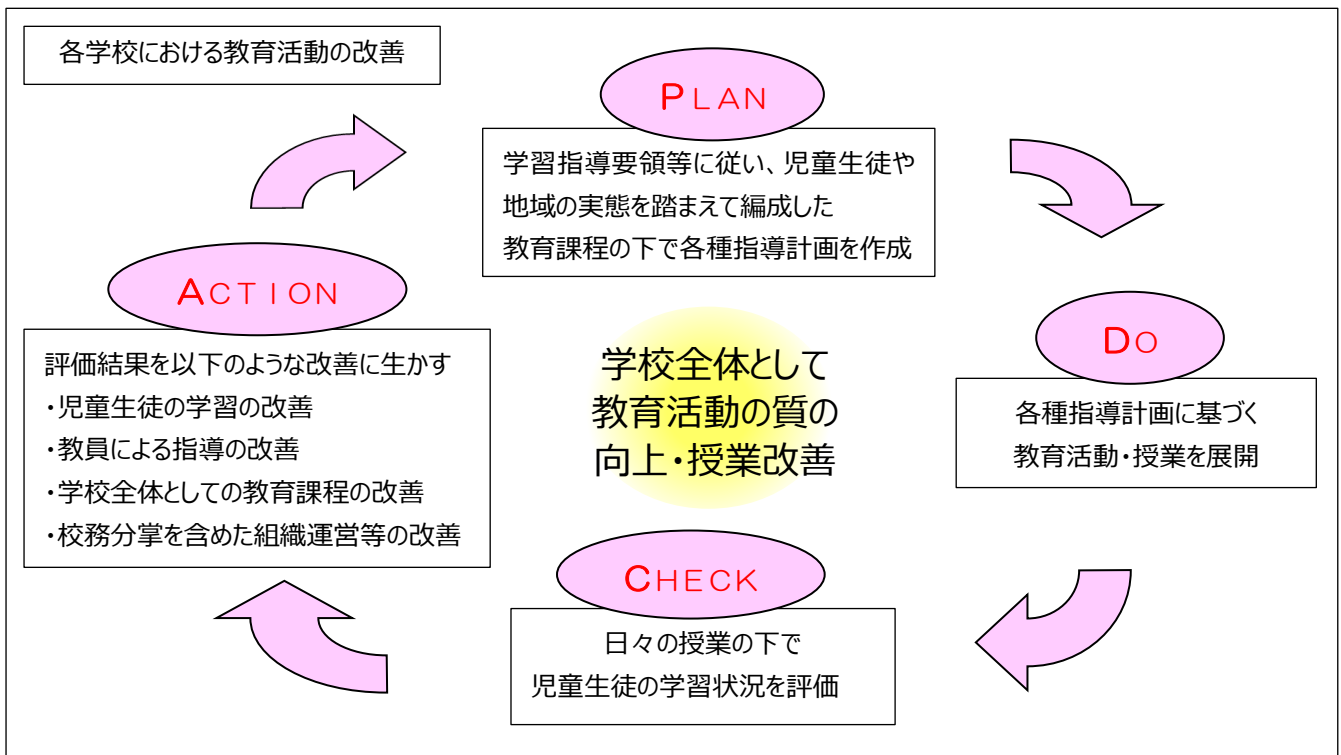
1 学習評価の基本的な考え方

学習評価は、学校における教育活動に関し、児童生徒の学習状況を評価するものであり、学習評価を通じて、

- 児童生徒にとっては、自らの学びを振り返って、次の学びに向かうことができるようにすること
- 教員にとっては、児童生徒の学習の成果を捉え、指導の改善を図ることが重要であり、児童生徒は学習改善、教員は授業改善につながるものにしていくことが求められています。



また、学習評価は、教育課程に基づいて組織的かつ計画的に教育活動の質の向上を図る「カリキュラム・マネジメント」の中核的な役割と、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を通して各教科等における資質・能力を確実に育成する上で、重要な役割を担っています。



以下の3点を基本的な考え方として持ち、学習評価を真に意味のあるものとすることが重要です。

- ① 児童生徒の学習改善につながるものにしていくこと
- ② 教員の指導改善につながるものにしていくこと
- ③ これまで慣行として行われてきたことでも、必要性・妥当性が認められないものは見直していくこと

2 評価の観点

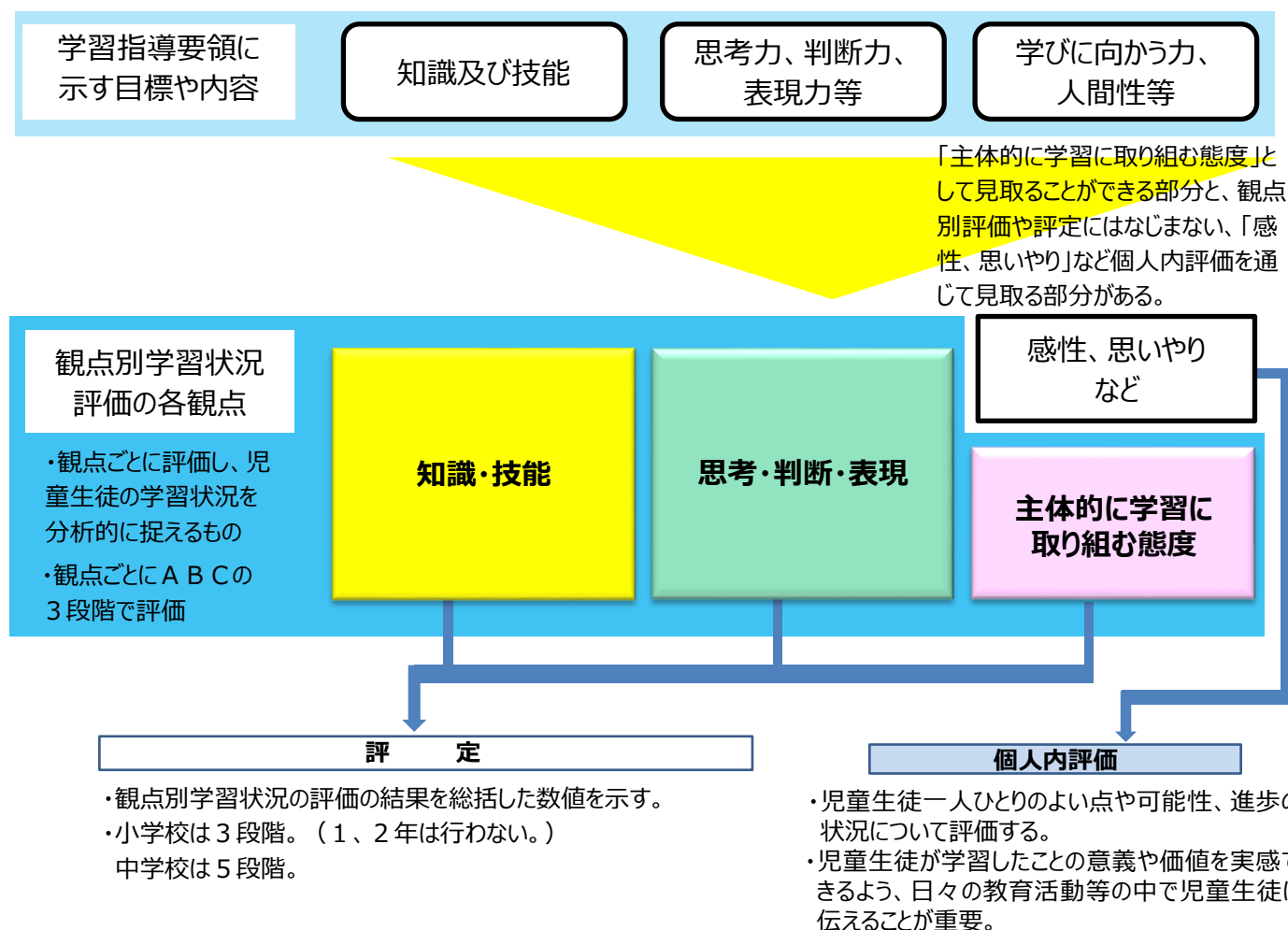
評価の観点が4観点から3観点になります。



資質・能力の三つの柱に基づいて、学習指導要領の各教科等における目標や内容について、再整理されたことを踏まえて、4観点から3観点到整理されました。

3 各教科における評価の基本構造と観点別学習状況評価

各教科における評価は、学習指導要領に示す各教科の目標や内容に照らして学習状況を評価するものです。



「知識・技能」の評価

<何を評価するのか>

- 個別の知識及び技能の習得状況について評価します。
- それらを既存の知識及び技能と関連付けたり活用したりする中で、概念等として理解したり、技能を習得したりしているかについて評価します。

※上記の考え方は、現行の評価の観点である「知識・理解」「技能」においても重視してきました。

- (例)
- ・小[算数] 除法が用いられる場面を式に表したり、式を読み取ったりすること。
 - ・小[図画工作] 自分の感覚や行為を通して、形や色などの造形的な特徴を理解すること。
 - ・中[社会] 世界各地における人々の生活やその変容を基に、世界の人々の生活や環境の多様性を理解すること。その際、世界の主な宗教の分布についても理解すること。
 - ・中[音楽] 創意工夫を生かし、全体の響きや各声部の声などを聴きながら他者と合わせて歌う技能
など

(参照) 学習指導要領（平成 29 年告示）の各教科等における「第 2 2 内容」

<どのように評価するか（例）>

- 事実的な知識の習得を問う問題と、知識の概念的な理解を問う問題とのバランスに配慮したペーパーテストの結果。
- 実際に知識や技能を用いる学習場面を設け、様子を見取ります。
 - ・児童生徒に文章により説明をさせ、内容を見取ります。
 - ・（各教科等の内容の特質に応じて、）観察・実験をさせたり、式やグラフで表現させ、内容を見取ります。

「思考・判断・表現」の評価

<何を評価するのか>

各教科等の知識及び技能を活用して課題を解決する等のために必要な思考力、判断力、表現力等を身に付けているかどうかを評価します。

※上記の考え方は、現行の評価の観点である「思考・判断・表現」の観点においても重視してきました。

- (例)
- ・小[社会] 情報を集め発信するまでの工夫や努力などに着目して、放送、新聞などの産業の様子を捉え、それらの産業が国民生活に果たす役割を考え、表現すること。
 - ・小[体育] 自己の能力に適した課題を見付け、水の中での動きを身に付けるための活動を工夫するとともに、考えたことを友達に伝えること。
 - ・中[数学] 既に学習した計算の方法と関連付けて、式の展開や因数分解をする方法を考察し表現すること。
 - ・中[理科] 化学変化について、見通しをもって観察、実験などを行い、イオンと関連付けてその結果を分析して解釈し、化学変化における規則性や関係性を見いだして表現すること。また、探究の過程を振り返ること。
など

(参照) 学習指導要領（平成 29 年告示）の各教科等における「第 2 2 内容」

<どのように評価するか（例）>

- 論述やレポートの作成、発表、グループでの話し合い、作品の制作や表現等の多様な活動の中で見取ります。
- ポートフォリオを作成させ、その内容を見取ります。

「主体的に学習に取り組む態度」の評価

<何を評価するのか>

知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組みを行おうとする側面とその中で自らの学習を調整しようとしているかという側面の二側面から評価します。

主体的に学習に取り組む態度のイメージ



主体的に学習に取り組む態度とは、自ら学習の目標を持ち、進め方を見直しながら学習を進め、その過程を評価して新たな学習につなげるといった、**学習に関する自己調整**を行いながら、粘り強く知識・技能を獲得したり思考・判断・表現しようとしている姿と示されています。



〇〇ができるようになりたいなあ。

そのためには〇〇を学ぶ必要があるな。

勉強したけれど、〇〇も必要だぞ。

勉強のやり方を少し変えてみよう。

http://wwwc.osaka-c.ed.jp/matters/curriculum/curri_no_4/hyoukaniatatte.pdf
(大阪府教育センター HPより)

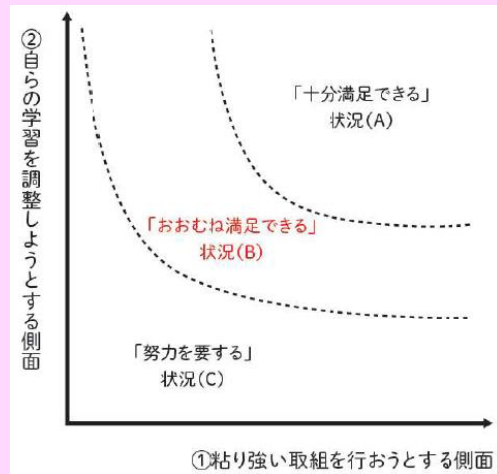
評価のイメージ

(学習評価の在り方ハンドブック 小・中学校編より)

①粘り強い取組を行おうとする側面

②自らの学習を調整しようとする側面

の二つの側面から評価する。



<どのように評価するか(例)>

- ノートやレポート等における記述内容
- 授業中の発言内容
- 行動観察
- 児童生徒による自己評価や相互評価の様子や記述内容

※教員が評価を行う際に、考慮する材料の一つとして用います。そのまま教員の評価とすることのないよう配慮する必要があります。

<留意点>

「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」(中央教育審議会 平成31年1月21日)では、「関心・意欲・態度」の観点の評価は、挙手の回数や毎時間ノートを取っているかなど、性格や行動面の傾向が一時的に表出された場面を捉えることであるような誤解が払拭し切れていないということが指摘されました。

従来から重視されてきた、各教科等の学習内容に関心をもつことのみならず、よりよく学ぼうとする意欲をもって学習に取り組む態度を評価するという趣旨であることに十分留意してください。

※これらについては、外国語活動(小学校)、総合的な学習の時間、特別活動においても同様に考えることができます。

※観点別評価の具体的な事例については各教科等の頁を参照してください。

4 学習評価の基本的な進め方

I 目標と観点の趣旨の確認

各学校の実態に応じて目標に準拠した評価を行うために、まず教科等の目標を踏まえた観点の趣旨、そして学年の目標を踏まえた観点の趣旨について確認することが必要です。ここでは、小学校国語を例に以下に示しますが、他教科も同様に確認します。

○活用資料

「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について（通知）」（以下、改善等通知）
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/nc/_icsFiles/afieldfile/2019/04/09/1415196_4_1_2.pdf（別紙4 文部科学省HPより）

（1）教科の目標を確認する。

【学習指導要領「教科の目標」】 学習指導要領 各教科等の「第1 目標」

(1)	(2)	(3)
（知識及び技能に関する目標） 日常生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるようにする。	（思考力、判断力、表現力等に関する目標） 日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。	（学びに向かう力、人間性等に関する目標） 言葉がもつよさを認識するとともに、言語感覚を養い、国語の大切さを自覚し、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。
今回の学習指導要領の目標は、資質・能力の3つの柱に基づいて再整理されている。		
※個人内評価として実施するものも含まれている。		

評価の観点及びその趣旨を確認する。

【改善等通知「評価の観点及びその趣旨」】

改善等通知 別紙4 評価の観点及びその趣旨

観点	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
趣旨	（知識・技能の観点の趣旨） 日常生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使っている。	（思考・判断・表現の観点の趣旨） 「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」の各領域において、日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げている。	（主体的に学習に取り組む態度の観点の趣旨） 言葉を通じて積極的に人と関わったり、思いや考えを広げたりしながら、言葉がもつよさを認識しようとしているとともに、言語感覚を養い、言葉をよりよく使おうとしている。

各教科等の学習指導要領の目標の規定を踏まえ、観点別学習状況の評価の対象とするものについて整理したものが教科等の観点の趣旨である。

（2）各学年の目標を確認する。

【学習指導要領「学年（又は分野）の目標」】〔第1 学年及び第2 学年〕を例示

学習指導要領 各教科等の「第2 各学年の目標及び内容」の学年ごとの「1 目標」

(1)	(2)	(3)
（知識及び技能に関する目標） 日常生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに、我が国の言語文化に親しんだり理解したりすることができるようにする。	（思考力、判断力、表現力等に関する目標） 順序立てて考える力や感じたり想像したりする力を養い、日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えをもつことができるようにする。	（学びに向かう力、人間性等に関する目標） 言葉がもつよさを感じるとともに、楽しんで読書をし、国語を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする態度を養う。
※個人内評価として実施するものも含まれている。		

評価の観点及びその趣旨を確認する。

【改善等通知 別紙4 「学年別（又は分野別）の評価の観点の趣旨」】

観点	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
趣旨 〔第1 学年及び第2 学年〕	（知識・技能の観点の趣旨） 日常生活に必要な国語の知識や技能を身に付けているとともに、我が国の言語文化に親しんだり理解したりしている。	（思考・判断・表現の観点の趣旨） 「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」の各領域において、順序立てて考える力や感じたり想像したりする力を養い、日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えをもっている。	（主体的に学習に取り組む態度の観点の趣旨） 言葉を通じて積極的に人と関わったり、思いや考えを広げたりしながら、言葉がもつよさを認識しようとしているとともに、楽しんで読書をし、言葉をよりよく使おうとしている。

各学年（又は分野）の学習指導要領の目標を踏まえ、観点別学習状況の評価の対象とするものについて整理したものが学年別（又は分野別）の観点の趣旨である。

II 内容のまとめりごとの評価規準の作成

Iを理解した上で、「内容のまとめりごとの評価規準」を作成します。

- 「内容のまとめり」とは、学習指導要領に示す各教科等の「第2 各学年の目標及び内容 2 内容」の項目等をまとめりごとに整理したものです。 ※各教科等の内容のまとめりについては、各教科の頁で示しています。
- 学習指導要領に示す各教科等の「第2 各学年の目標及び内容」の「2 内容」において「内容のまとめり」ごとに育成をめざす資質・能力が示されています。
- このため、「2 内容」の記載はそのまま学習指導の目標となりうるものです。
- 児童生徒が資質・能力を身に付けた状況を表すために、学習指導の目標となりうる「2 内容」の記載事項の文末を「～すること」から「～している」と変換したものが、「内容のまとめりごとの評価規準」です。

※教育課程を編成する主体である各学校が、学習指導要領に基づき児童生徒や学校、地域の実情に応じた目標や評価規準を設定する必要があります。

学習指導要領に示す目標の実現状況を判断するよりどころ（評価規準）を、内容のまとめりごとに作成し、観点別学習状況の評価を的確に行うことにつなげます。

以下に、学習指導要領から「内容のまとめりごとの評価規準」を作成する際の手順について、中学校数学〔第2 学年〕C関数（1）一次関数の例を示します。

例 中学校 数学 第2 学年 「一次関数」

- （1）各教科における「内容のまとめり」と「評価の観点」との関係を確認する。

中学校学習指導要領（平成29年告示）第2章 第3節 第2 各学年の目標及び内容 2 内容より

- （1）一次関数について、数学的活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 次のような知識及び技能を身に付けること。

（ア）一次関数について理解すること。

（イ）事象の中には一次関数として捉えられるものがあることを知る。

（ウ）二元一次方程式を関数を表す式とみること。

イ 次のような思考力、判断力、表現力等を身に付けること。

（ア）一次関数として捉えられる二つの数量について、変化や対応の特徴を見だし、表、式、グラフを相互に関連付けて考察し表現すること。

（イ）一次関数を用いて具体的な事象を捉え考察し表現すること。



（下線）…知識及び技能に関する内容
（波線）…思考力、判断力、表現力等に関する内容

※「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料には、教科等ごとに、学習指導要領の記載内容に沿った【観点ごとのポイント】が示されています。各教科等における「内容のまとめりごとの評価規準」を作成する際に参考にしてください。

(2) 「内容のまとめりごとの評価規準」を作成する。

学習指導要領 2 内容	知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力、人間性等
	ア (ア) 一次関数について <u>理解すること</u> 。 ア (イ) 事象の中には一次関数として捉えられるものがあることを <u>知ること</u> 。 ア (ウ) 二元一次方程式を関数を表す式と <u>みること</u> 。	イ (ア) 一次関数として捉えられる二つの数量について、変化や対応の特徴を見だし、表、式、グラフを相互に関連付けて <u>考察し表現すること</u> 。 イ (イ) 一次関数を用いて具体的な事象を捉え <u>考察し表現すること</u> 。	※内容には、学びに向かう力、人間性等について示されていないことから、該当学年目標(3)を参考にする。

文末を変える

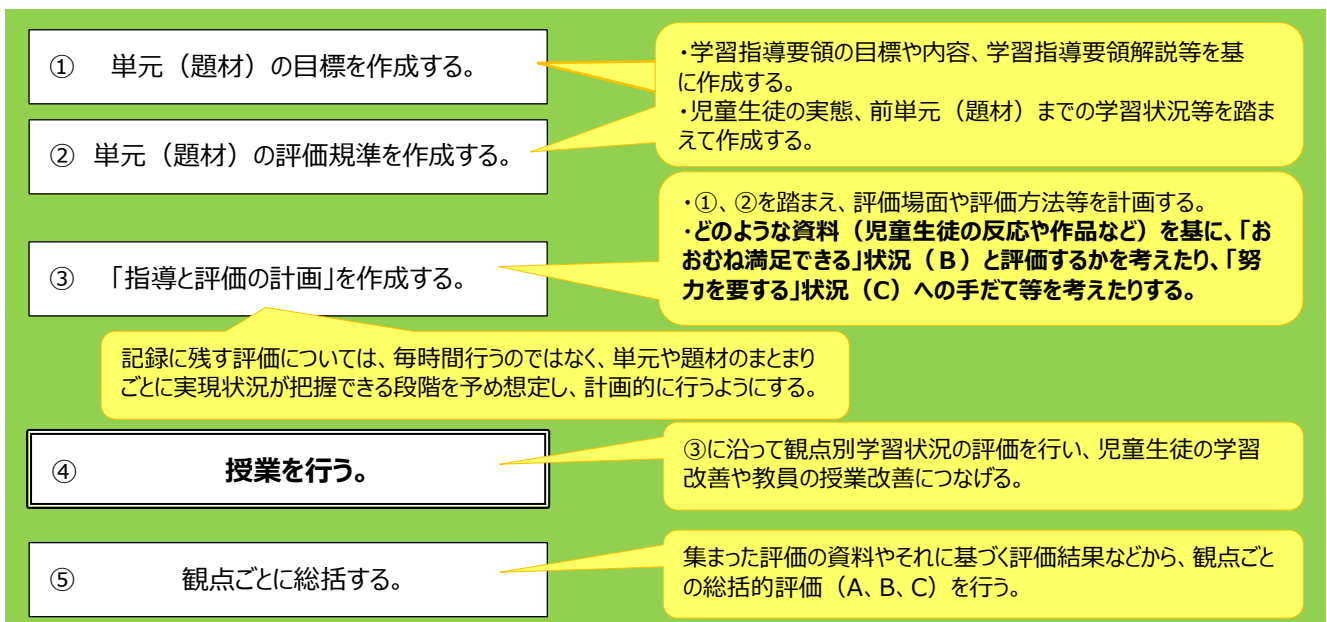
児童・生徒や学校地域の実情に応じる

内容のまとめりごとの評価規準例	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
	<ul style="list-style-type: none"> 一次関数について<u>理解している</u>。 事象の中には一次関数として捉えられるものがあることを<u>知っている</u>。 二元一次方程式を関数を表す式と<u>みることが</u>できる。 	<ul style="list-style-type: none"> 一次関数として捉えられる二つの数量について、変化や対応の特徴を見だし、表、式、グラフを相互に関連付けて<u>考察し表現することができる</u>。 一次関数を用いて具体的な事象を捉え<u>考察し表現することができる</u>。 	<ul style="list-style-type: none"> 一次関数のよさを実感して粘り強く考え、一次関数について学んだことを生活や学習に生かそうとしたり、一次関数を活用した問題解決の過程を振り返って評価・改善しようとして<u>している</u>。 <p>※必要に応じて学年別の評価の観点の趣旨のうち「主体的に学習に取り組む態度」に関わる部分を用いて作成する。</p>

中学校の数学科を例に内容のまとめりごとの評価規準の作成手順を示しましたが、他教科も同様に内容のまとめりごとの評価規準を作成することができます。各学校においては、「内容のまとめりごとの評価規準」の考え方を踏まえて、学習評価を行う際の評価規準を作成します。

Ⅲ 各教科等の単元（題材）における観点別学習状況の評価の進め方例

※複数の単元（題材）にわたって評価を行う場合など、以下の方法によらない事例もあることに留意してください。



※『①～④』までの具体については、各教科の事例において紹介しています。

IV 観点別学習状況の評価の総括から評定まで

評価の計画に基づいて行った、様々な児童生徒の観点別学習状況の評価に係る記録の総括の時期としては、単元（題材）末、学期末、学年末等の節目が考えられます。

観点別学習状況の評価結果は、「十分満足できる」状況と判断されるものをA、「おおむね満足できる」状況と判断されるものをB、「努力を要する」状況と判断されるものをCと表しています。ここで表された学習の実現状況には幅があるため、機械的に評定を算出することは適当でない場合もあることを考慮し、総括の考え方や方法を、あらかじめ各学校で決めておく必要があります。

（1）評価資料を基にした単元（題材）における観点別学習状況の評価の総括

○ 単元（題材）における総括の例（観点別学習状況の評価に係る記録が、観点ごとに複数ある場合）

・評価結果のA、B、Cの数を基に総括する場合

何回か行った評価結果のA、B、Cの数が多きもの（例、「ABB」→「B」）が、その観点の学習状況を最もよく表現しているとする考え方による総括の方法です。その際、「AABB」の総括結果をAとするかBとするかなど、同数の場合や三つの記号が混在する場合の総括の仕方を、あらかじめ各学校で決めておく必要があります。

次	時	学習活動	知	思	態	児童（生徒）の様子
第1次	1	○○を比較する。				写真を比較して、・・・問題を見いだした。
	2	・・・	A			・・・
	3	・・・		A		・・・
第2次	4	・・・	B		A	・・・
	5	・・・	A			・・・
	6	・・・		B		・・・
	7	・・・			A	・・・
単元の総括			A	B	A	

総括の仕方をあらかじめ各学校で決めておく。

・評価結果のA、B、Cを数値に置き換えて総括する場合

例えば A = 3、B = 2、C = 1 のように数値によって表し、合計したり平均したりする総括の方法です。例えば、総括の結果をBとする範囲を $[2.5 \geq \text{平均値} \geq 1.5]$ とすると、「ABB」の平均値は、約2.3 $[(3 + 2 + 2) \div 3]$ で総括の結果はBになります。

名前	知識・技能					思考・判断・表現			主体的に学習に取り組む態度			
	知①	知②	知③	知④	総括	思①	思②	総括	態①	態②	態③	総括
V	B	C	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
W	A	B	A	A	A	A	A	A	A	B	A	A
X	B	A	A	B	B	A	A	A	A	A	B	A
Y	B	B	B	A	B	B	A	B	B	B	A	B

平均値は2.25 $[(2 + 2 + 2 + 3) \div 4]$ であるため知識・技能の総括の結果はBとした。

・単元の後半の評価結果を重視して総括する場合

児童生徒の学習は、指導の経過とともに深まったり高まったりするものとする考え方に立つ総括の方法です。例えば、単元の指導の経過とともに C→B→B→A と評価が変化した観点については、単元における総括の結果は A になります。

	次 時	第1次					第2次		第3次			児童（生徒）の様子に関する特記	単元の評 価の総括
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10		
Z	知			A						A		…が確実にできる。(第9時)	A
	思				B		*			A		…、対話的な学びの中で気づくことができました。(第7時)	A
	態						B	B			B	日常生活に結び付け…(第10時)	B

指導に生かす評価を行った。

単元の指導の経過とともに、B→Aと変化しているので、総括の結果はAとした。

(2) 学期末、学年末における観点別学習状況の評価の総括

○学期末における総括の例

・単元における総括を基に、学期末に総括する場合

	単元				学期末の観点別学習状況の評価 の総括
	I	II	III	IV	
知識・技能	A	B	C	B	B
思考・判断・表現	B	A	A	A	A
主体的に学習に取り組む態度	B	B	A	B	B

学期末や学年末における観点別評価の総括の考え方や方法については、(1)で示した例や「中学校における学習評価に関する参考資料 平成25年7月」大阪府教育委員会を参照。

○学年末における総括の例

・学期末の総括を基に、学年末に総括する場合

	1学期	2学期	3学期	学年末の観点別学習状況 の評価の総括
知識・技能	B	C	C	C
思考・判断・表現	A	B	A	A
主体的に学習に取り組む態度	B	A	B	B

(3) 学期末、学年末における観点別学習状況の「評定」への総括

学期末や学年末には、評定への総括を行います。学年末に評定へ総括する場合には、学期末に総括した評定の結果を基にする場合と、学年末に観点ごとに総括した結果を基にする場合が考えられます。

○ 観点別学習状況の評価の評定への総括の例

各観点の評価結果をA、B、Cの組み合わせ、又は、A、B、Cを数値で表したものに基づいて総括し、その結果を小学校では3段階、中学校では5段階で表します。

・A、B、Cの組み合わせから評定に総括する際、各観点とも同じ評価がそろう場合

小学校：「B B B」であれば2を基本としつつ、「A A A」であれば3、「C C C」であれば1とするのが適当であると考えられます。

中学校：「B B B」であれば3を基本としつつ、「A A A」であれば5又は4、「C C C」であれば2又は1とするのが適当であると考えられます。

・各観点とも同じ評価がそろう場合以外

各観点のA、B、Cの数の組み合わせから適切に評価することができるようあらかじめ各学校において決めておく必要があります。

小学校：「3」：AAA、AAB

「2」：AAB、AAC、ABB、ABC、BBB、ACC、BBC

「1」：BCC、CCC

中学校：「5」：AAAの中で特に程度が高いもの

「4」：AAA、AAB

「3」：AAB、AAC、ABB、ABC、BBB、ACC、BBC

「2」：ACC、BBC、BCC、CCC

「1」：CCCの中で一層努力を要するもの

※観点別学習状況の評価A～Cにおける学習の実現状況の幅に注意して判断する必要があります。

○「評定」への総括の例

・学年末に単元における総括を基に観点ごとに総括した結果を基にする場合（小学校）

	単元					学年末の観点別学習 状況の評価の総括	評定
	I	II	…	VI	…		
知識・技能	A	B	…	C	…	B	2
思考・判断・表現	B	A	…	A	…	A	
主体的に学習に取り組む態度	B	B	…	A	…	B	

評定への総括の考え方や方法については、「中学校における学習評価に関する参考資料 平成25年7月」大阪府教育委員会を参照。

・学年末に単元における総括を基に観点ごとに総括した結果を基にする場合（中学校）

	単元					学年末の観点別学習 状況の評価の総括	評定
	I	II	…	VI	…		
知識・技能	A	B	…	C	…	B	3
思考・判断・表現	B	A	…	A	…	A	
主体的に学習に取り組む態度	B	B	…	A	…	B	

総括する際には、子どもたちの学習状況をABCといった記号や、1～5（小学校は1～3）といった数値に分類したものとして捉えるのではなく、結果の背景にある児童生徒の具体的な学習の実現状況を常に思い描き、適切に捉えることが大切です。

また、評価に対する妥当性、信頼性等を高めるために、各学校では観点別学習状況の評価の観点ごとの総括及び評定への総括の考え方や方法について共通理解を図り、児童生徒及び保護者に十分説明し理解を得ることが大切です。

参考資料

- ・「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料（小学校・中学校） 令和2年3月
国立教育政策研究所 教育課程研究センター
- ・「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について（通知）」（平成31年3月29日付け）
文部科学省
https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/1415169.htm
- ・学習評価の在り方ハンドブック 小・中学校編
国立教育政策研究所 教育課程研究センター
<http://www.nier.go.jp/kaihatsu/shidousiryou.html>
- ・新学習指導要領に関する文部科学省のホームページ
文部科学省
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/index.htm
- ・中学校における学習評価に関する参考資料 平成25年7月
大阪府教育委員会